

令和4年度
公立高等学校入学者選抜学力検査問題

国語

第一問 次の問いに答えなさい。

問一 次の文の——線部①～⑥のうち、漢字の部分はその読み方をひらがなで書き、カタカナの部分は漢字に改めなさい。

・ ハンドルを握る。①

・ 水底に魚が潜む。②

・ すばらしい演奏に陶醉する。③

・ お年寄りをウヤマウ。④

・ 前の試合のハンセイを生かす。⑤

・ 結果から原因をスイソクする。⑥

問二 次の文の——線部①、②のカタカナを漢字に改めたものとして、正しいものを、それぞれあとのア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

・ 一石ニチヨウの効果を狙う。①

ア 兆 イ 丁 ウ 鳥 エ 頂

・ 彼はまさに大器バンセイの人物だ。②

ア 晩 イ 判 ウ 板 エ 万

問三 次の□に共通して入る語を、あとのア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

・ □許可 ・ □作為 ・ □頓着

ア 未 イ 非 ウ 不 エ 無

問四 Aさんの中学校では、まもなく始まる読書週間の活動内容を全校生徒に知らせるため、図書委員が校内放送をすることになりました。そこで、図書委員のAさんは、事前に放送のリハーサルを行い、そのリハーサルを、図書委員のBさん、Cさんに聞いてもらいました。次は、Aさんが行った【放送のリハーサル】と、その後の、三人による【話し合いの一部】です。あとの(一)～(五)の問いに答えなさい。

【放送のリハーサル】

皆さん、こんにちは。図書委員会からのお知らせです。

来週から春の読書週間が始まります。読書週間の活動は、図書委員会が、二週間にわたって実施されるものです。皆さんに、たくさんの本を読んでもらえるよう、私たちはさまざまな企画を考えました。

一つ目は、特製しおりのプレゼントです。読書週間に四冊以上の本を借りた人には、図書委員が作ったオリジナルのしおりを差し上げます。二つ目は、多読クラスの表彰です。読書週間内の貸し出し冊数をクラスごとに集計し、冊数が最も多いクラスを表彰します。

三つ目は、「図書室だより特別号」の発行です。特別号では、新たな試みとして、「先生がおすすめる一冊」というテーマの特集記事を掲載します。この記事で紹介する本は、すべて図書室にあるので、ぜひ読んでみてください。

なお、読書週間の期間中、本の貸し出しは、一回につき、一人五冊までとします。

今回の活動をきっかけにして、これまであまり本を読まなかった人にも、読書習慣を身につけてもらえたらうれしいです。

以上、図書委員会からのお知らせでした。

【話し合いの一部】

〈Aさん〉 放送のリハーサルを聞いて、何か意見はあるかな。

〈Bさん〉 企画が複数あるので、企画の内容を具体的に紹介する前に一言を加えて、情報を整理することによって、こちらが伝えたいことを、聞き手が理解しやすくなるような話し方の工夫をしてはどうかな。

〈Aさん〉 なるほど。聞き手が理解しやすくなるよう、情報を整理して話すことは大切だね。Cさんは、何か気づいたことがあるかな。

〈Cさん〉 三つ目の企画のところで、「先生がおすすめる一冊」というテーマの特集記事を掲載します。」と言っていただけれど、ひと息で話すと、伝えたい内容を正確に理解してもらえない恐れがあるから、聞き手に、伝えたい内容が正確に伝わるように、^③ 間の取り方を工夫してはどうだろう。

〈Aさん〉 分かった。もう少し、間の取り方を工夫してみるよ。

〈Bさん〉 ^④ 企画について述べた後の、「なお、読書週間の期間中、本の貸し出しは、一回につき、一人五冊までとします。」という部分から、普段借りることができる冊数とは異なると伝わりそうだけれど、少し唐突な感じがするよ。このような言い方をしたのには、何か理由があるのかな。

〈Aさん〉 うん。普段借りることができるのは一人二冊までであることを踏まえて、読書週間は、特別に五冊まで借りることができる、ということ伝えたいのだけれど、放送の時間は限られているから、普段と異なる情報だけを、簡潔に話したつもりだよ。

〈Bさん〉 そうか。確かに簡潔に話すことは大切だね。でも、本を五冊まで借りられるのは読書週間の期間中だけのことであるという情報をうまく伝えるためには、やはり、普段は一人二冊までであるということ、簡潔に述べる方がよいのではないかな。

〈Cさん〉 私もそう思う。読書週間だけ、という特別な感じになるし、読書週間が終わった後に図書室を利用する人にとっても、役に立つ情報だからね。その他のことでは、最後の方で言っていた「これまであまり本を読まなかった人にも、読書習慣を身につけてもらえたらうれしいです。」というところが気になったよ。

^⑤ 放送は音声だけで伝えることを考慮すると、「読書習慣」という部分は、別の表現にするとよいのではないかな。

〈Aさん〉 いろいろと話してくれて、ありがとう。二人の意見を参考に、放送に臨むことにするよ。

(一) 【放送のリハーサル】の中に「読書週間の活動は、図書委員会が、二週間にわたって実施されるものです。」とありますが、適切な表現にならないように、「実施される」の部分を、**五字以内**で直しなさい。

(二) 【話し合いの一部】の中に「聞き手が理解しやすくなるような話し方の工夫」とありますが、その工夫として、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「今回の企画は、次の三つです。」と、企画がいくつあるのかを述べる。

イ 「今回の企画は、いくつあると思いますか。」と、質問を投げかける。

ウ 「今回の企画は、皆さんが楽しめるものばかりです。」と、企画のよさを訴える。

エ 「今回の企画は、生徒全員が参加できます。」と、企画の対象を明確にする。

(三) 【話し合いの一部】の中に「**③**間の取り方を工夫」とありますが、「先生がおすすめる一冊」というテーマの特集記事を掲載します。」という部分を、「／」で示すところの間を取って話したとき、伝えたい内容が正確に伝わるような間の取り方として、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 先生がおすすめる／一冊というテーマの特集記事を掲載します。

イ 先生がおすすめる一冊／というテーマの特集記事を掲載します。

ウ 先生がおすすめる一冊という／テーマの特集記事を掲載します。

エ 先生がおすすめる一冊というテーマの特集記事を／掲載します。

(四) 【話し合いの一部】の中の「**④**企画について述べた後の、」で始まるBさんの発言の意図として、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア Aさんのリハーサルを聞いて、その後の話し合いが深まるように質問を工夫し、Aさんの人柄を理解しようとした。

イ Aさんのリハーサルを聞いて、実際に放送を聞く生徒から出そうな質問を予想し、その質問にAさんが戸惑わないようにした。

ウ Aさんのリハーサルを聞いて、興味を覚えたことについて質問し、Aさんが話し合いをうまく進められるようにした。

エ Aさんのリハーサルを聞いて、自分が気になった点を質問することによって、Aさんの考えや思いを引き出そうとした。

(五) 【話し合いの一部】の中に「**⑤**放送は音声だけで伝えることを考慮すると、『読書習慣』という部分は、別の表現にするとよい」とありますが、Cさんがこのように言うのはなぜですか。三十字以内で答えなさい。

第二 問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中堅漫画家の亮二は、人気の衰えを感じ、引退して実家の家業を手伝うことになって向かった空港で、似顔絵描きの老紳士と出会う。老紳士は亮二の作品を知っており、自身もかつては漫画家だったと語る。

「過去も名前も捨てて、それから各所を流れ回れまして。縁やらつてやら巡り合わせとかありまして、気がつくとき、ここで似顔絵を描くようになりまして。そしたら——」

ふうつと老紳士はため息をつき、笑った。

「楽しかったんです。ああこれが自分の天職だったのか、と思いました。毎日毎日笑顔を見つめて、笑顔を写し取り、描き残してゆく。笑顔でお礼をいわれ、笑顔を描いて得たお金に感謝し、笑顔に囲まれて暮らしてゆける。なんて幸せな日々を得たのだらうと思いました」

なるほど、と亮二はうなずいた。

「わかるような気がします。——俺も、故郷に帰ったら、似顔絵に挑戦してみようかな」

半ば思いつき、半ば本気でそう口にしたとき、

「あなたは、似顔絵じゃなく、漫画を描けばいいのに」

静かな、けれど強い声で老紳士がいった。

「え、でも、俺はもう田舎に帰るんです」

「ご自分でさっきおっしゃってたじゃないですか。いまはどこにいても漫画が描ける、都会から遠くにいても、出版社とやりとりはできるし描けるって担当さんに説得されたって。そして、担当さんたちはあなたの復帰を待っていてくれるって。おうちのお手伝いをしながら、自分のペースで少しずつ描くこともできるんじゃないですか？」

「それは——そうなんです、でも……」

亮二は口ごもった。

「俺は、そこまであの料亭の漫画が好きかどうかかわからないです、俺が本当に描きたい、ヒーローが活躍するような少年漫画は、人気が出なくて描けないです。いや、自分ではそこそこうまいと思ってましたよ。自分の漫画、大好きでしたよ。でも、運も才能も、あと一歩、たりてなかったっていうか……夢を見続けるのは、無理だったというか」

「夢、あきらめなきゃいけないですかね？」

老紳士はいまは目を上げ、ひた、と亮二を見据えるようにしていた。

「夢の卵を抱えて、いつか孵る日待つ人生というの、いいかと思えますよ。夢見ることを諦めるのは、いつでもできますのでね」

亮二は返答に迷い、茶化すように笑った。

「いやでも、俺の漫画家としての人生は、失敗に終わったと、その、思ってます」

「人生に失敗とかバッドエンドとかってあるんですかねえ。生きている内は続いている連載漫画みたいなものなんじゃないかと思うんですが。そう勝手に打ち切らなくても」

③ 老紳士は楽しげに笑う。笑っていない目で。

「人生という漫画の読み手は自分。描くのも自分。読者の気が済むまでは夢の卵を抱えていてもいいんじゃないですか？」

「……」

「ああ、いやすまない、すみませんでした」

ふと我に返ったように老紳士は笑い、手を打つと、柔らかな表情で亮二に頭を下げた。

「ついね。もつたいないと思っちゃって。いやね、業界に長かったでしょう？ 運やツキに恵まれなくて、消えていった漫画家をたくさん見てきたんですよ。すごくいいものを書いてた奴もたくさんいた。でもみんななくなっちゃってね。いや、消えた漫画家といえば、自分自身がまさにそのひとりなんです、ははは。——あのね、覚えていて欲しいんです。人間どんなに実力があっても、良い風に恵まれなくて、にっちもさっちもいかなくなる」と

諦めずに。良い風が吹くその日まで」

「風を、待つ——？」

「はい」

老紳士は微笑んだ。どこか仙人のような、予言者のような、そんなまなざしをした。

そして、ふつと笑って付け加えた。

「すみませんね。あなたの漫画があまりに良かったものだから、つい夢をみてしまったのかも知れません。自分が行かなかつた道のその先を目指してもらえるかも知れないと。もつと遠くまで、あなたなら行けるかも知れないと。——そうしたら、わたしの心の片隅にまだ生きていた、漫画が好きだという思いが報われて成仏してくれそうな気がしたのかも」

亮二は老紳士にお礼をいって、ふらふらと歩き出した。飛行機の搭乗時間がどうなったのか、もう諦めて明日の便にでも変えてもらった方がいいのでは、と脳の片隅の冷静な部分が気にしていたけれど、それよりも老紳士から聞いた言葉が、じんと沁みこんだ。

（そうか、諦めなくてもいいのか）

（夢の卵を抱えていても、いいのか）

（風を待つ——）

第三 問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

食事や入浴、あるいは散歩など、さまざまな習慣があるが、呼吸ほど頻繁に行われる営みはない。人は、寝ているときですら呼吸をしている。呼吸に変化が生じてくると生活にも違いが出てくる。世の中ではさまざまなことが呼吸的に行われていることが分かってくる。

たとえば、話すという行為も呼吸の深度によって性質が変わってくる。独りで話すことを独話という。誰かと言葉を交わすことを会話という。そして、深いところでつながりながら言葉や経験の深みを探るのが対話だ。

どんなに多く言葉を交わしても、互いの呼吸が合わなければ会話に留まり、対話にはならない。対話は、互いに呼吸の共鳴から始まる。

考えが浅いまま独話する。人はすぐに行き詰まる。袋小路に入ってしまったら、愚かなことを思い込むことすらある。浅い独話は危険ですらある。

奇妙なもので、会話は、互いが一方的に話していてもどうにか成り立つのである。ときおり、カフェなどで原稿を書いていると、隣の人の声がどうしても耳に入ってくる。大きな声で、楽しそうに話しているのだが、よく聞いてみるとそれぞれが好きなことを話しているだけで、接点がほとんどない場合が少なくない。相手が受け止めていようがまいが関係なく、ひたすら近況を話している。

こうしたことをどんなに繰り返しても、けっして対話にはならない。対話は、話者が自分の言いたいことを話したときに始まるのではなく、相手の「おもしろい」を受け止めたところに始まる。

「おもしろい」とひらがなで書いたのは、対話が始まる時、私たちが受容しなくてはならないのは、言葉にできる「思い」や「想い」だけでなく、その人の心の深いところにあつて、本人すらその全貌を知らない「念い」が、おぼろげながらにでも感じられなくてはならないからである。対話において人が、どうにかして相手に伝えたいと願うのは、言葉になる事象よりも、むしろ、言葉にならない「念い」なのではあるまいか。

近代哲学の方向性を決定したとされるデカルトが、読書をめぐって、次のように興味深いことを述べている。

すべて良書を読むことは、著者である過去の世紀の一流の人びとと親しく語り合うようなもので、しかもその会話は、かれらの思想の最上のものであるだけを見せられる、入念な準備のなされたものだ。

(デカルト『方法序説』谷川多佳子訳)

「親しく語り合う」と記されているように、ここでは「会話」と訳されているが、その本質的意味は、先に述べた「対話」であることが分かる。

デカルトは、「読む」という営みも対話的に行われなくてはならない、と考えている。相手が語ることを受け止めるだけでなく、その言葉を受けて自分の内面で生起したことを声によって「語る」のとは別の方法で、過去の賢者に送り届けなくてはならない、というのである。

それは「書く」ことにほかならない。デカルトは多くの本を読んだが、何よりも深く読んだ人だった。そして、その経験に呼応するように深く書いた人だった。

「読む」と「書く」はまさに、呼吸のような関係にある。「読む」は言葉を吸うこと、そして「書く」は吐くことに似ている。「読む」あるいは「書く」という営みは、世に言われているよりもずっと身体を使う。「あたま」だけでなく、心身の両面を含んだ「からだ」の仕事なのである。

さらにいえば、深く読むために多く本を読んでもあまりうまくいかない。それでは吸ってばかりいることになる。

書くことにおいても同じで、深く書きたいと思って、多く書いてもあまり功を奏さない。深く「読む」ためには深く「書く」必要がある。

「読む」を鍛錬するのは「書く」で、「書く」を鍛えるのは「読む」なのである。「読む」と「書く」を有機的につなぐことができれば言葉の経験はまったく変わる。それを実現する、もつとも簡単な行為は、心動かされた文章を書き写すことなのである。

本に線を引くだけでなく、その一節をノートなどに書き記す。じつに素樸な行為だが手応えは驚くほど確かだ。

「十読は一写に如かず」ということわざもある。一度書き写す、それは十回の読書に勝る経験になる、というのである。

近代以前の日本では、多くのの人にとつて、本を読むとは、持っている人から借りて、それを書き写すことだった。「読む」と「書く」を同時に行うことによつて初めて、「読む」という行為が始まる。それが常識だった。

(若松 英輔「読書のちから」による)

*をつけた語句のへ注

袋小路 ———— ここでは、物事が行き詰まった状態のこと。

デカルト ———— 十七世紀に活躍したフランスの哲学者。

生起 ———— ある物事が現れ起こること。

功を奏さない ———— 成功しない。うまくいかない。

有機的 ———— 多くの部分が結びついて全体をつくり、互いに関連・影響し合いながらまとまっているさま。

素樸 ———— 素朴。

問一 本文中に「奇妙なもので、」とありますが、筆者がこのように述べる理由を説明したものととして、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 会話とは、誰かと言葉を交わすことであるにもかかわらず、互いが一方的に話していてもどうにか成り立つものであるから。
- イ 会話は、互いが一方的に話していてもどうにか成り立つにもかかわらず、話し手と聞き手が必要だと考えられているから。
- ウ 会話とは、互いが一方的に話していてもどうにか成り立つものであるにもかかわらず、独話とは異なると思われるから。
- エ 考えが浅いままの独話はすぐに行き詰まるにもかかわらず、会話ならば、互いが一方的に話していてもどうにか成り立つから。

問二 本文中に「こうしたことをどんなに繰り返しても、けっして対話にはならない。」とありますが、次の文は、「対話」と「会話」について、筆者の考えを説明したものです。□にあてはまる適切な表現を考えて、二十文字以内で答えなさい。

「対話」は、他者と言葉を交わすという点では「会話」と共通するが、□という点で、「会話」とは異なるのである。

問三 本文中に「読む」という営みも対話的に行われなくてはならない、」とありますが、次の文は、「読む」という営み」について、筆者の考えを説明したものです。あとの(一)、(二)の問いに答えなさい。

対話的に行う「読む」という営みは、書物から読み取ったことを踏まえて、□A□を、「書く」という方法を用いて、□B□に語りかけることによって成り立つのである。

(一) □A□にあてはまる言葉を、本文中から十二文字でそのまま抜き出して答えなさい。

(二) □B□にあてはまる言葉として、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア その書物に登場する人
- イ その書物を読んだ人
- ウ その書物を読んではない人
- エ その書物を著した人

問四 本文中に「読む」は言葉を吸うこと、そして「書く」は吐くことに似ている。」とありますが、筆者がこのように述べるのはなぜですか。最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「読む」によって必要な言葉を「からだ」に取り込めば、「書く」によって不要な言葉が「からだ」から排出されると考えられるから。
- イ 「読む」によって多くの言葉を「あたま」に取り込めば、「書く」ときに多くの言葉が使えようになると考えられるから。
- ウ 「読む」とは言葉を「からだ」に取り込むことであり、「書く」とは言葉を「からだ」から送り出すことであると捉えることができるから。
- エ 「読む」とは言葉を「あたま」に取り込むことであり、「書く」とは身体を使って言葉を送り出すことであると捉えることができるから。

問五 本文を通して、筆者が最も主張したいことはどのようなことですか。呼吸のありように触れながら、五十五字以内で説明しなさい。

第四問 次の【漢文】と、その【書き下し文】を読んで、あとの問いに答えなさい。

【漢文】

① 夫^{ソレ}治^{をさむル}国^ハ、猶^{なホ}如^{ごとシ}裁^う樹^{ルガ}。本^{ほん}根^{こん}不^レ揺^{ゆるガ}。

則^{すなはチ}枝^し葉^{えふ}茂^も盛^{せい}ス。

君^{きみ}能^{よク}清^{せい}静^{せい}、百^{ひやく}姓^{せい}。

何^{ナニ}得^ン不^レ安^ル樂^{ナラ}乎^ヤ。

【書き下し文】

夫れ国を治むるは、猶ほ樹を(おもそも) (ちようじ)

栽うるがごとし。本根揺がざれば、(植えて育てると同じだ) (根もと)

則ち枝葉茂盛す。(枝葉は繁茂する)

君能く清静ならば、百姓(心清らかであれば)

何ぞ安樂ならざるを得んや。(どうして安樂とならないことがあるうか)

〔貞観政要〕による

*をつけた語句のへ注

君——君主。
百姓——人民。

問一 【書き下し文】を参考にして、【漢文】中の「夫治国」に返り点を付けなさい。

問二 【漢文】中に「本根不揺、則枝葉茂盛」とありますが、「本根」と「枝葉」について、【漢文】中の語で、それぞれが対応しているものの組み合わせとして、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | |
|---|----------|----------|
| ア | 「本根」……君 | 「枝葉」……樹 |
| イ | 「本根」……百姓 | 「枝葉」……君 |
| ウ | 「本根」……君 | 「枝葉」……百姓 |
| エ | 「本根」……百姓 | 「枝葉」……国 |

問三 次の対話は、【漢文】について話し合ったものです。あとの(一)、(二)の問いに答えなさい。

〈Xさん〉 【漢文】の最後にある「何ぞ安樂ならざるを得んや」という表現から、「いや、安樂とならないはずがない」という考えが読み取れるよ。つまり、【漢文】で筆者は、国を統治するにあたっては、**A** ことが大切だと述べているね。
〈Yさん〉 うん。そして、そのようなことを述べている、【漢文】の論の進め方の特徴は、「**B**」と説明できるよ。

(一) **A** に入る適切な表現を考えて、十字以内で答えなさい。

(二) **B** にあてはまる表現として、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 二つのものを対比して、それぞれの良いところを分析している
イ たとえ話を用いることによって、主張に説得力を持たせている
ウ 話題を急に転換することによって、読者の注意を引きつけている
エ 中心的な主張を述べた後に根拠を示して、論理を明確にしている

第五問

次の【創作している俳句】について、に指示語を入れて、この俳句を完成させるとしたら、あなたは【言葉の候補】の中の、どの指示語を選びますか。あとのア～ウから一つ選び、その記号を解答用紙の所定の欄に書き入れ、その指示語を用いることによって、句全体でどのような情景や心情を表現できると考えたのかを、百六十字～二百字で書きなさい。

【創作している俳句】

見渡せば春の訪れ にある

【言葉の候補】

- ア こころ　イ そこ　ウ どい

